
ヒーローは流星をオレンジに染めて

貞次シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローは流星をオレンジに染めて

【Nコード】

N2053B

【作者名】

貞次シュウ

【あらすじ】

ある日誌面で出会った一頭のサラブレッド『トウカイテイオー』に僕は恋をした。

オレンジの風景（前書き）

流星：馬の顔にある白い模様

オレンジの風景

それは綺麗な競走馬のフォトに飾られた月刊誌だった。安っぽい胡散臭い予想情報などを排した純粋に競走馬を愛するための情報誌である。

この年、夏頃から競馬にのめり込んでいた僕は、それを本屋で買い求めた。読みたい特集記事に興味のある馬が載っていたからだ。

『トウカイテイオー』

それが興味を惹いた馬の名前だ。去年の三歳時、無敗で皐月賞、ダービーと二冠を達成するも、残りの一冠、菊花賞を前に無念の骨折。

年が明けて骨折明けのレースは楽勝したものの、続く長距離レースの最高峰、春の天皇賞では初の敗北を喫する事となる。その後、長期休養を取ったテイオーはこの時、秋競馬に備えて充電中だった。

したがって今年の夏から競馬を始めた僕にとってはまだ見ぬスターホースだったのだ。

（カッコいい……）

家に帰り、逸る気持ちでページをめくった僕の目に映るその馬は、写真だけでもゾクリとする威風を放っていた。

馬にも顔かたちはそれぞれで様ではない。テイオーは整った目鼻立ちに鼻先ですっと切れる見事な流星を持ち、足元には白いソッ

クス（蹄上の白い模様）。一足だけはき忘れたのが愛嬌だった。

思えばこの時この瞬間から、僕の心はこの馬に囚われてしまったのだろう。

その私鉄電車のドアが開くと、中にすし詰めにされていた人々は、まるで水を得た魚のようにホームへと降り立った。

声高に馬名を挙げては予想自慢する人、昨日のレース結果に花を咲かせる人と様々だが、新聞を片手に足早にホームの出口に向かう様は共通している。

かくいう僕もその中に混じり、期待と興奮でやや震える足どりのまま流されていた。

誌面でトウカイテイオーと出会ってから二カ月ほど過ぎていたこの日、福岡から新幹線に乗った僕は人波に揉まれながらここ、東京競馬場の入り口に立つことになったのだ。

（でっけえ〜！）

眼前に左右に広がるスタンドは、今まで通っていた地元の小倉競馬場とは比べるまでもなく規模が違う。そして圧倒的な人の多さに戸惑いながらも、それは自身の軽い興奮と同化していった。

そのただっ広いスタンドを抜けると眼下には広大なコースが横たわっていた。

「じいじ……」

勿論、わざわざこんな遠路を踏んでまで来たのは他でもない、今日は世界の強豪馬を招待して行われる国際G1ジャパンカップが行われるのだ。そして当然僕の目当てはそう、復活を賭けたテイオーにあった。

あの雑誌を見た日から、テイオーへと募る心は日増しに大きくなっていったのだ。おかしな話かもしれないが、たかが競走馬に僕は恋をしてしまったのかも知れない。

まだ見ぬ恋人に……全くおかしな話だ。

午前中のレースは淡々と進み、やがて午後になると僕の腰は落ち着かなくなった。次第に近付いてくるメインレース、いや正確には出走するテイオーが気になって他のレースを予想するどころでは無くなっていったのだ。

柱にもたれ、8レースかそこの新聞の予想欄に赤ペンで印をつけていた僕だが、バサリと新聞を閉じると足をパドックへと向けた。もう居ても立ってもいられない。

人混みを掻き分けながら馬券売場の並ぶ建物を抜け、陽光の射す外へと飛び出した。

「マジかよ……」

目指すパドックが見えてくると、思わずそう毒つくより仕方がない。想像を遥かに超える人垣がそこに出現したからだ。

所詮片田舎の競馬場しか経験していない素人競馬ファンだった。パドックにこれほどの人が集まるなど予想出来なかったのだ。

自分の希望としては最前列から間近にテイオーの姿を見る腹づもりであったが、それは全く不可能である事をここに来て思い知らされた。

勇んで歩いていた足はやがて速度を落とし、そして足と足の間を縫うように慎重に前に進めざるを得なくなり、ついには動かす事が出来なくなってしまう。

最前列まではまだまだ遠いがここまでが限界だった。

（仕方ないか）

心でついたため息は自然と口から漏れ、思わず空を仰ぐ。そこには色とりどりの国旗が掲揚されていて、改めて別世界のレースだったことを痛感させられた。

僕はそのまま、まだ見ぬ恋人を待つことになった。

やがて日が傾きかけた秋の深まる府中の空の下、正装した外国人関係者が華やかにパドックを彩る。俄かに僕の心臓は鼓動を早めた。

ざわつく場内。立ち上がる人々。期待が熱気を生み出すのか、周囲の温度が上がったように感じる。

食い入るように見つめる視線の先はパドックへの出入口。そして先頭の馬が姿を現すと、一瞬周囲が静まり返った。

僕は唾を飲んでその光景を眺める。

一頭……二頭……三頭……

時折シャッター音が響くが、ほとんどの人はまだ待っていた。もちろん、僕もだ。

そしてついに恋い焦がれたテイオーが悠然とパドックへ姿を現すと、瞬間にシャッター音の嵐が巻き起こり、ざわりと空気が動く。みんな待っていたのだ、テイオーを。

何という存在感だろうか？

たった一頭の馬によってこれだけの人々が色を変えられてしまうのだ。

（これがスターホース……）

自分だけが惚れ込んでいるわけではない。これほど多くの人がテイオーを待ち望んでいたのだ。

その人々の期待と熱意を軽くないしながら悠然とパドックを周回する姿は、馬にしてカリスマを備え、僕の心を震わせるに十分以上の衝撃を与えた。

「カッコ良すぎる」

感動に打ち震える僕の中では、多少なりとも美化されていたろう。しかしそれでも良いのだ。確かにテイオーは人を惹きつける何かを持っていた。

この時僕に実感出来たのはそう、その期待感だけだったのかも知れない。

出走馬が次々とパドックから姿を消し、地下馬道へ降りてゆくと、人間様も民族大移動を始める。パドックから建物内を抜けてコースへと移動するのだ。

もちろん座る席などない。立ったまま敷き詰められた頭越しにコースを睨みつけるだけだ。

観客のボルテージは最高潮に達する寸前となっていた。眼前のタワービジョンが馬番と馬名を表示すると、その中に『トウカイテイオー』の文字が浮かび上がる。それに呼応する大声援。火を点されたように熱くなる胸の内。熱気と興奮がオレンジに染まった空を焦がし、そしてファンファーレと共に爆発するようにスタンドを揺るがせた。

その大歓声が一瞬静まったように感じた刹那、闘志を漲らせた各馬を抑えていたゲートが開け放たれた。

『スタートしました！』

実況アナウンスが始まると共に再び湧き上がる歓声。それを一身に浴びながら、テイオーは軽々と500キロに近い馬体を加速させてゆく。

左回りにコースを約一周する、距離2400mのレース。素早く先団に取り付いたテイオーは僕の目の前を駆け抜け、1コーナーへと飛び込んでいった。

「よしっ、よしっ！」

絶好のポジションだと思えた僕は、ありったけの声を上げて自分に、そしてテイオーに言い聞かせる。もちろんそれは歓声の洪水の中にあっては一つの泡程のものでしかない。

それでも僕は興奮を抑えきれずに終始誰に言うわけでもなく声を発していた。

レースは中盤。特に動きはなく、遠い向こう正面の状況はターフビジョンに頼るほかない。場内アナウンスも坦々と馬名を読み上げるだけで硬直した状態を物語っていた。

そして迎えた3コーナー。たった一頭に許された栄光のゴールを目指し、ここから様相は一変する。

後方に控えていた騎手が激しく手綱をしごく馬はペースを上げ、中団の馬も併せてペースを上げる。整然と隊列を組んでいた馬群は瞬く間に横に広がり、襲い掛かる騎馬隊のごとく怒濤の進撃を開始した。

場内アナウンスが忙しく入れ替わる馬名を告げトーンを急上昇させると、再びスタンドが湧き上がる。一団となり4コーナーから馬群が飛び出すと、その歓声は喉を裂くような怒号へと変わった。

「来い！」

「差せー！」

「そのままっ！」

思い思いの馬券に沿った雄叫びが飛び交うなか、僕は肝心のテイオーの姿を見失っていた。

歓声の濁流に飲み込まれ、心臓を誰かに押しつぶされるような不安に支配される。希望が粉々に打ち砕かれたような絶望感が僕を支配した。

（どこだ！ テイオーは……まさか馬群に沈んだのか？）

僕は周囲の人たちとは裏腹に声を出せないでいる。必死に目を凝らすその時、耳に飛び込んできたのは一際高いトーンで実況するアナウンサーの声――

『先頭はナチュラリズム！ ナチュラリズム先頭……』

追い討ちをかけるようなアナウンスだったが、続いた名前は僕を狂喜させるものだった。

『外からトウカイテイオー！ トウカイテイオー二番手！』

（あれかつ！）

ようやく見つけたその勇姿。先頭に躍り出たナチュラリズムにビッシリ馬体を併せにかかったトウカイテイオーがそこにいた。

「うおおー、テイオー！ テイオーっ！」

僕の興奮はここに来て最高潮を迎えた。あらん限りの声で恋人の名を叫ぶ。その恋人は美しい流星をオレンジに染め、一足だけソックスをはき忘れた四肢も伸びやかにターフを駆け抜けてゆく。

一完歩、一完歩……テイオーが馬体をついに並べた。

「差せえー！ テイオー！」

我を忘れて僕は叫び続ける。怒涛の歓声、響く馬蹄、唸る鞭、騎手も馬も火花を散らして勝利を目指す。

その中で彼は主張する。

『俺が帝王なんだよ』

そんな威厳を放ちながらテイオーはグイと先頭に躍り出た。そして地鳴りのような大声援を受けながら、テイオーは栄光のゴール板を突き抜けたのだ。

「よおおっしやあーっ！」

僕は一際大きく吠え、馬上の老獺な騎手は珍しく渾身のガッツポーズを見せた。スタンドの声援は歓喜に満ち、アナウンスは何度もテイオーの名を呼び讃えている。

そんな興奮の渦の中で、僕とトウカイテイオーのファーストエピソードは幕を閉じた。無論、帰りの車中では何度思い出してにやにやと顔を弛ませていたことが分らない。

ただ、鮮やかに脳裏に刻まれたオレンジの風景が、僕の一生の宝物になったことだけは確かだった。

そして深く刻まれた思い出のワンシーンは、トウカイテイオーに対する想いを更に強くさせる事になったのだ。

悪夢

小倉競馬場に着いたのはまだ朝の九時前だというのに、モノレールの駅から競馬場までを繋ぐ空中を渡る狭い通路は、ごった返す人々と並々ならぬ熱気に満たされていた。

今の時期（年末）に、ここ小倉競馬場で競馬が行われることはない。従って、今は場外馬券場としての機能しかないのだ。

それにも関わらずこの人の多さはレース施行期間中と比べても遙かに上回っている。

単なる場外馬券場に？

そう。今日は競馬ファンにとっては特別なレースが行われる。

そのレースとは出走馬がファンの投票によって決められ、スターホースが一堂に集い一年を締めくくる最大のG1レース――

『有馬記念』である。

天気は良かったが気温はかなりの低さで風も強い。建物内は暖房が効いていて寒さはしのげるが、座る場所はなく落ち着けない。かといって座れるが吹きさらしのスタンドも、寒さに弱い僕にとってみればかなりの勇気が必要とする。

さて、人が右往左往する雑多な建物内に足を止め、しばし考えて見ることにした。

「さっぶ……」

冷たくなった手を売店で売っている紙カップの熱燗で温めようと買ってきたのだが、誰しも考えは同じなのだ。

温まる間もなく売れてしまうカップ酒は、熱燗という商品名の冷酒と何ら変わりはなかった。

「しかも高いし」

少しは温まるかとちびりと飲んでみたものの、酒に慣れた胃にはただの冷や水と変わりはない。今は枯れ草と化した芝生のコースを眺めていると、視覚からも寒さが染み込んでくるようだ。

（早く始まんないかなあ）

文字だらけの競馬専門誌を傍らに置くと、カラフルに印刷されたスポーツ新聞を手取る。

『トウカイテイオー大本命！』

どの紙面でも同じような扱いである。一面はテイオーの写真に占領され、他馬は所詮脇役の扱い。

僕はそれを見ては何度も頬を弛ませた。

（当たり前だろ）

少しの高揚が寒さをしのぐ防寒具のようだ。メインレースが近づくにつれ、やがて神経は競馬へと集中して寒さは和らいでゆく。

僕は財布を抜き取ると、残金を確認した。

（やばい……）

夢中で賭けている時は気付かなかったが、午後からの連敗は財布に致命的な打撃を与えていた。このままではメインレースまでに破産してしまってもおかしくはない。

仕方なく二つのレースは見送ることにし、それならばと一旦建物内に非難する。さすがに観てるだけでは寒さがぶり返してくるのは目に見えていたからだ。

「テイオーは今日は負けるよ」

人波を避けて壁際でコーヒーをすする僕の耳に、そんな声が聞こえてきた。

なにを！ とばかりに睨みつけるようにその方向を見ると、隣で座り込んでくるくすんだジャンパーを着込んだ二人の初老の男性の姿があった。

もちろんこちらの存在などは気にもせず話を続けている。

「岡部（主戦騎手）が騎乗停止になって乗り替わりやろ？ ケチの始まりやね」

「おー、岡部が騎乗停止とか滅多に無かもんなあ。よりによってこ

げな時にならんでも……」

「運も大事やけんねえ。強かだけじゃ勝てんばい、有馬は」

確かにそれが不安材料だとは認識していた。しかしそんなものテイオーならば軽く跳ね返してくれるはずだと、期待に込めてくれる馬だと――

僕は信じて疑わなかった。

競走馬の居ない閑散としたコースだったが、メインスタンド前に設置されたターフビジョンに出走馬の体重が発表されるとざわめく喧騒が響き渡る。

目をスタンド側に戻すと、前方に広がる景色とは対照的な熱気がそこには渦巻いていた。

いよいよ始まるうとしている一年で一番競馬ファンが熱くなる日、一年の総決算『有馬記念』。

僕にとっては初めての体験なのだが、その特別な雰囲気はいやというほど肌を伝って感じ取れる。

周りの人々は今年一年の競馬の名場面を高揚した口調で語り合い、新旧王者と女王らが初めて手合わせをするドリームレースの予想に自分の夢を重ね合わせている。

僕もその熱気にあてられたように馬券を購入した。

有り金すべてはたいしたテイオーの単勝馬券。つまりテイオーが一着にさえなれば当たりだ。配当は低いが、これ以上確実な馬券は無いと思われる。

（頼むぜ、テイオー！）

彼が勝利する姿を想像するだけで胸が躍った。僕はどんな喝采を浴びせるのだろうか？

そんな思惑が興奮を伴った緊張へと変わるG1のファンファーレが鳴り響くと、場外馬券場にも関わらず一斉に手拍子が湧き起こった。僕もその興奮に吞まれて冷たくなった手のひらを高らかに打ち鳴らす。

僕は遠い空の向こうにいるテイオーにターフビジョンを通して想いを馳せた。

どんな心境なのだろうか？ 熱くなっているのだろうか？ 怯えているのだろうか？ それとも……

（泰然自若かな？）

悠然と構えてゲートに収まるテイオーを見てそう思った。

最後の一頭が収まると、スタンドに緊張が走る。日本中の競馬ファン
の視線が一点に集中する刹那――

『スタートしました！』

どおつと湧き上がる場内。約二分半の最高のドラマの開演に、歯止めの効かない興奮が胸を満たす瞬間。しかしその興奮は一瞬にして水を浴びせられたように消え去った。

『トウカイテイオー出遅れました！』

（馬鹿な！）

常にボンとスタートを決めるテイオーがまさかの出遅れだ。加速する馬群を一息置いて追いかけてゆく姿に場内はどよめいた。

『テイオーは負けるよ』

さっきの言葉が頭をよぎり、胸に立ち込める不安。僕はそれを振り払おうと声を荒らげた。

「大丈夫大丈夫！　これからこれから！」

まだまだ先は長い。徐々に順位を上げて、勝負所で好位置から差しきるだけのこと。結果が変わるわけではない。

レースは中盤。大逃げを打つメジロパーマーがその差を更に広げてゆく。テイオーはまだ後方。その差を詰められないでいた。

「おいおい、テイオーやばいんじゃないか？」

周りからそんな声が上がります。熱気を帯びた声援に影が見えだした。

『メジロパーマー先頭。差を広げる！　大逃げ。大逃げです』

不安を煽るアナウンスを努めて聞き流しながら画面を注視する。
いよいよ勝負所の三コーナー、そこには早めに手綱をしごいて前に
出ようとするテイオーの姿があった。

（どうした、テイオー！）

初騎乗の田原のゴーサインも虚しく脚色が冴えない。アナウンス
も絶叫に近くなった

『メジロパーマー先頭で直線に入った！ 後続はまだ差があるぞ！』

動揺するスタンド、必死に前を追うテイオー。眼前に繰り広げら
れる光景に僕は目を覆いたくなった。

『テイオーどうした、テイオー伸びない！』

そこまでだった。そこから展開される直線の攻防にテイオーの名
前は出てこなかった。

絶望と失意のざわめきの中、祭典は終わりを告げる。

『11着惨敗』

それがこのレースにおけるテイオーのリザルトだった。

パラパラと人が帰路につき始めるスタンドに僕は立ち尽くしてい
た。

現実感のないレースだった。今、勝者が……いや、テイオーが居るべきウイニングサークルには逃げ粘った伏兵の姿がある。

それを呆然と眺める僕の手のひらから馬券が滑り落ち、そしてそれは木枯らしに吹かれ、誰に拾われる事もなくハラハラとスタンドに舞った。

平成四年十二月二十七日。この日をもって今年の競馬は幕を閉じた。

無念を胸に抱いたままで――

曇り空

年が明けてから判明したことだが、ティオーはスタート直後に腰を痛めていたらしい。そしてリフレッシュも兼ねて鹿児島島の牧場へと放牧に出される事となる。

かたや僕はといえば、相変わらず仕事に忙殺されてはいたものの、暇を見つけては競馬に勤しんでいた。

僕の仕事は旅行会社。年末の繁忙期が終われば次はスキーツアーの手配に追われ、それが終われば卒業旅行。それから休む間もなくゴールデンウィークへと突入してゆく。

そのわずかな間隙を縫って、僕はある計画を遂行しようとしていた。

ティオーに逢いに行く。

それをずっと考えていたのだ。普段は遠い空の向こうにいるティオーだが、わざわざ九州にやってきているのだ。

これを逃す手はなかった。

軽いバイクの排気音がずっと一定の音階を刻み、ヘルメットの中でこだましている。まだ肌寒い空気を押し分けるようにして退屈な高速道路をひたすら南下していた。

あくびを噛み締めながら、何度目かのトイレ休憩をすると、昼食

がてらに買い求めたスポーツ新聞を開いた。

『ビワハヤヒデ大本命』

春のクラシック（三歳馬のみ出走出来る三冠レース＝皐月賞、ダービー、菊花賞。牝馬限定で桜花賞、オークス、秋華賞となる）のステップレースの記事だった。

この時有力馬として名前を挙げられていたのは他にウイニングチケット、ナリタタイシンの二頭。

クラシックは三強対決と目論まれ、例年にない盛り上がりを見せていた。時代は確実に新しいスターホースを生み出しつつあり、置き去りにされたようなテイオーの境遇に焦燥感を拭うことが出来ない。

甘口のカレーライスを頬張りながら他のライバルにも注目すると、やはり長距離の王者メジロマッククインが堂々主役のようだ。

やはり焦る。馬の活躍期間というのは極めて短く、何度も骨折してはその旬の時期を逃してしまうからだ。

僕が焦っても仕方ないのだが、残りのカレーをかき込むようにして平らげると、水を流し込んで慌てて席を立った。

（待ってるよ！）

まあ、相手してみれば待つてはいないだろう。単なる迷惑な見学者かも知れない。

（気持ちだよ、気持ち）

自分に都合の良いように解釈しながら再び高速道路を駆け、目的のインターを降りると南国とは思えない寂しい海沿いの道へと出る。

気温はさすがに暖かくなってきたが、その景色は異様なほど寒そうに見える。

（こんなとこに牧場なんてあるのかなあ？）

左右にせわしく走らせていた目も次第に動きが鈍ってきた。人里もなくなり対象物が無くなってきたのだ。

かわりに湧いてくる不安。何度か止まって地図を確認しながらさらに進んだ頃、目指す牧場の看板は頼りなさげに建っていた。

「あつた……」

ようやく見つけた目的の牧場は海の近くにあり、のどかな牧草地をイメージしていた僕のビジョンは粉々に砕け散ることになった。

場内へ続く道への入り口でバイクを止めると、歩いて場内へと入って行く。エンジン音で馬を驚かせてはいけないからだ。

奥に見える厩舎は最新の設備などとは無縁に思えるほど小さく小汚い。もちろん牧場自体を見るのは初めてだし、自分の中で創っていた理想の牧場と比べていただけなのだが……

やがて前方から関係者らしき人が登り歩いてきた。遠くからでも怪訝そうな表情を浮かべているのがありありと分かり、少し気後れ

して頭を下げる。

そのキャップの下から覗く肌を真っ黒に焼いた中年男性は思いの外大きな声で話しかけてきた。

「何か用か？」

多少荒っぽい言い方だった。僕はおずおずと目的のテイオーの事を話す。

関係者の方は濃い眉を持ち上げると嘆くように言い放った。

「もうおらんよ。今頃北海道に行つとるはずやぞ」

「ええっ！ 本当ですか」

「あんた新聞読んでない？ また骨折しとるぞ」

「嘘……」

当時はインターネットなど全く無い時代。情報は全てスポーツ新聞に頼らざる得ない時代だ。

毎日欠かさず読んでいるならともかく、たまにしか買わないようでは情報は入ってこなかったのだ。

ガッカリだった。

つい今し方まであれほど胸が高鳴り熱くなっていたものが、急激にその温度を失してゆくところか新たな危機感に苛まれる。

まさに天国から地獄へ……だ。

「また骨折したんですか？」

「軽いらしいけどな」

僕は大きく吸い込んでいた息を吐き出した。それには嘆いた声が混じってしまい、胸のうちがいか沈んでいるかを物語るものだった。

（北海道かあ……）

僕は空を仰いだ。曇り空が切れ目なく続き、晴れることがないような気がしてくる。

おそらく僕の心もいま、他人から見ればこんな風に映るのだろう。

無駄足を返して再び高速道路をひた走る。

その時一台の車が荒つぽく追い抜きをかけてきた。ムシャクシャしていた訳ではないが、なぜか僕の癪にさわるものだった。

アクセルグリップを握る手が熱くなり、風切り音が耳にさわるほどの大きさになる。

いったん交わすとその車は戦意を喪失したのかスピードを緩めてバックミラーから姿を消す。そのだらしなさを罵りながら、余熱を

帯びた胸のなかで一つの決意がなされた。

何というか、勢いだと思う。

（行つてやろうじゃねえの、北海道！）

たかが競馬。たかが競走馬。でも、それでも……されどトウカイ
テイオー……なのだ。

闇の先へ

夏がやってきた。そして目の前に広がるのは地平線が広がる広大な大地と、はるか彼方まで続くまっすぐな道だった。

「北海道はデッカいどー！」

使い古された台詞をヘルメットの中で叫ぶその顔は、至極喜びと感動に満ち溢れたものだっただろうと思う。

バイク乗りと言ってもローリング族あがりの僕は、旅を楽しむツアラ―とは異色の存在だ。

したがって旅慣れている訳ではなく、すれ違うバイカー達にピースサインを送られることに当初戸惑いを覚えたのだが、札幌を抜け日高へと続く国道へ出た頃には、なんのためらいもなくピースサインを送り返す自分がいた。

何日も休みが取れるわけではなかった。

出来れば飛行機で千歳空港からレンタカーなりでの行程を踏みたかったのはやまやまなのだが、盆休みのピークである。

得意先からの無理難題な予約やオーバーブッキングを抱えて胃に穴が空きそうなプレッシャーと闘う日々が続くこの時期、自分に回すより客に回したほうがどれだけ精神的苦痛から逃れられるか……

したがって前日より手のひらが筋肉痛になるほどアクセルを開けっ放したまま、本州を単騎縦断してきたのだ。

二日目の今日の午後過ぎには憧れのヒーローに逢えるはずだった。疲れ果ててはいるものの、もうすぐ訪れるであろう至福の時間のことを考えると、それすら心地の好いものと思えてしまう。

しかし先ほどからどうにも我慢出来ないことがひとつあった。

「寒いんじゃないカラー！」

誰に言うわけでもなく、あえて言うならばこの北の大地に対してなのだろうが、次第に悪態をまき散らす回数が多くなってきた。

『夏はＴシャツ一枚でツーリング』

それが僕の常識であつたし、過去の経験からもそれを疑うような事柄は今までなかったことだ。ここではその常識が非常識であることを痛感していた。

にわかに雲が空を覆い、かろうじて背中を暖めていた日光が遮られると我慢は限界に達し、街道沿いにポツンと建つワーク服ショップに駆け込んだ。

ちなみに服はＴシャツしか持って来ていない。レインウェアすら持ってきていないという有り様。

ツーリングに慣れた人から言わせれば自殺行為だそうだ。

そして店内に入ると、値札から見る上着選びが始まった。久々に伸ばした膝が冷たさを思い出してこわばっている。

結局選んだのは黄色い薄手のレインウェアだった。店内にいる間に激しい雨がウィンドウを濡らし始めたからだった。

二千円ほどの安物のレインウェア。しかしこれくらいが余分に使えるギリギリの金額なのだから大した貧乏旅行である。とにかく再び走り出したものの、雨のおかげで寒さを凌げるわけでもなく、水しぶきにまみれながら先を急ぐはめになったのだ。

（最悪だな）

悪い視界と体温を容赦なく奪う雨粒。それは確かにマイナス要素ではあるが、最悪はその直後に現れた。

腰に感じていた力強い駆動力が突然失われ、後ろにかかっていた重力は逆転して僕を軽く前につんのめらせた。

「マジかよ！」

高らかにマフラーから吐き出されていた排気音がぐぐもった機械音に変わる。ガス欠の類ではない。明らかにミスファイアを起こしてエンジンが止まってしまったものだ。

最悪の事態はここから始まった。

雨粒がヘルメットのシールドに当たっては弾けて流れ落ちてゆく。なだらかな山道を登り始めたさなか、静寂な世界には雨の織りなす音以外、何もなかった。

最後に見かけた街すら遥かに遠い。目の前にある山道も果てしなく続いている。

（とにかく直すしかないな）

息絶えたように寂しく目に映る愛車を見下ろすと、頼りない車載工具を取り出した。

おそらくは電装系のトラブルだと見当はついている。ただ、乾かさないと直らない可能性が大きいのだ。

タオルひとつ入っていない小さなデイバッグはすでに水を含んで重くなり、下に着たＴシャツもいつの間にか雨の侵入を許していた。

（やばいなあ……）

油にまみれてゆく指をせわしく動かしながらも、この時はまだ少しの余裕がある。しかし、キックスターターを無限に感じるほどの回数蹴り下ろし、足の感覚が麻痺したころ、ふと見上げた空の暗さに焦りと不安が膨れ上がった。

見え辛くなってきた手元の時計を覗き込む。時刻はすでに午後六時半を回っていた。

（どうする？）

いよいよもって窮まった進退。夜のしじまは容赦なく広がりを見せている。

（どうするっても……）

この状況を打破するためにはバイクの復活が必要不可欠だ。さしあたって今日の牧場見学が絶望的ならば、雨露のしのげる場所を探さなくては野宿出来るような状態ではない。

奇跡的に所持していた懐中電灯を手にとると、寒さに身を震わせながら修理を再開した。

（厄介なことになったもんだ）

時々自分の無鉄砲さに嫌気がさすことがある。いまが正にそれだ。多少の後悔がなかったと言えば嘘になるだろう。ここまでの道のりを鑑みるに、多分に呆れるような理由でここにいる。

（たかが競走馬……）

その想いと共に甦ってくるのは、あのオレンジの風景だった。

「されどトウカイテイオーか」

物事が自分の思い通りに運ばなければ何もかもすぐ嫌になって投げ出してしまう僕だったが、その台詞によって胸に灯る熱い想いが、くじけそうになる意志を辛うじて支えていた。

馬鹿は馬鹿なりに馬鹿の意地を持っているものだ。

しかしその胸に灯る最後の灯火も、懐中電灯の電池切れという結末に追従するかのように勢いをなくす。

容赦なく雨が降り注ぐ闇の中で、僕は水膜が流れるアスファルトにへたりこんだ。

（何してるんだろ？ 僕は……）

疲れが一気に襲ってきたようだ。頭が痺れたようにジーンと細やかにざわめく。目をつむると闇の底に体が落ちてゆくような感覚さえ覚えた。

雨の音は人の歓声にも似ているのだな……と気がついた時には、僕はあの日の記憶の中に身を置いていた。

ティオーの名を絶叫するアナウンス。歓喜に包まれたスタンド。鮮やかに切り取られた僕の人生のページは、それから不意に有馬記念への映像へと切り替わる。

騒然とするスタンドは悲鳴に満ち、ティオーのプライドは地に墜ちた。そして三度目の骨折。

傷ついたティオーの姿が浮かび上がり、胸に痛みが走る。

「ティオー……君はいま何をしてるの？」

闇の続く道の先へと視線を向けた。

「やっぱり……逢いたいよ」

その独り言の語尾が震えていたのが自分でも分かった。

雨音に混じってカシャリとスタンドを跳ね上げる音が響いた。バ

イクの重さが腕を伝わり、靴底が踏ん張る。

（だったら行くしかないよな）

勾配はさほどきつくなかったが、それでもバイクの重さを倍に感じさせる。

車輪がゆっくりと回転を始めると、僕は一步步坂を登りだした。

金色の夜明け

水でふやけた足裏の皮が靴にすれて破けたのだろうか？ 踵と足裏に擦り傷のような痛みが走る。

もうどれくらいの時間押し続けているのだろうか。ずいぶん長い時間押ししているような気もするが、さほど時間が経っていないかのようにも思える。

雨を避けるためにかぶり続けていたヘルメットが息苦しさを助長させ、我慢が出来なくなつてそれを脱いだ。夏でも冷たい雨が容赦なく髪の間染み込み、そしてすぐに額から流れ落ちた。

歩き続けるわけを探して自分に言い聞かせながら歩く。

もちろんテイオーに会いに行くという理由付けのほかに、この先に今日泊まる予定にしていたキャンプ場もある。そこに行けばゆっくり眠れるはずなのだ。

そんな理由を重ねなければ到底歩き続けられるものではないだろう。

こんなとき、いい年をした男であろうと泣きたくなるものだ。何度も何度も後悔と決意が交錯する。それとともに考えもしなかった様々な不安までが頭に浮かんできた。

——もしかしたらテイオーはもう完治して、栗東のトレーニングセンターに帰っているかもしれない。

——テイオーだけに見学など許してくれないかもしれない。

そして

——僕は本当にテイオーに逢えるのだろうか？

次々と湧いては打ち消すマイナスイメージにさいなまれながら、それでも僕の足は時々休みを繰り返すものの止まることを許さなかった。何がここまで僕を追い立てているのだろうか？

頭に繰り返し流れるあの風景。今ではあれは幻だったように思えてくる。

そしてついに何も考えられなくなった。疲労は極限に達し、体力はすでに限界に達している。

それでも一歩、また一歩。僕は歩いてゆくのだった。

やがてふくらはぎが痙攣を起こしたころ、はっと意識が現実に戻った。

辺りをふいに見渡すといつの間にか雨が止んでいる。そして木々の色や山々と空の稜線が際立っていることに気づいた。

（朝……なのか？）

僕はついにどこにもたどり着くことなく、夜が白んでゆく頃までバイクを押し続けていたのだ。そのこと自体僕にすら信じられないことだった。

その事実には然として、ついにここに来て足は止まった。

（もう駄目だ）

雨が上がったのであれば、朝が来てしまったのであれば何も焦る必要はない。ゆっくりと日が昇るのをまって修理して、そしてテイオーに逢いに行けば良いのだ。

こんなことなら押してくる必要もなかったな……と思いもしたが、そうしなければ寒さで凍えていたことだろう。おかげで寒さは感じることがなかったのだから。

そしてスタンドを立てて休憩しようとしたその時だった。

木々の間から洩れてくる鳥のさえずりに混じり、かすかに馬のいななきが聞こえてきたのだ。

（もしかして……）

と、すでに萎えた心が再びざわめく。しかし、ここまで来る間にもいくつかの牧場があった。そのたびに牧場名を確認したのだが、それらは目指す牧場ではなかった。

どうせまた——と、やはりそのままバイクを立てかけようとしたのだが、いったん傾けた車体を少し躊躇したのち、僕の腕はもう一度その車体を起こしていた。

（どうせついでだ）

まだ薄暗い道の先百メートルほどだろうか、かすかに牧場の入り口らしくガードレールの切れ目とそこに掲げられた看板が見える。

最後の力を振り絞りたどり着いたそこには

『二風谷育成センター』

と書かれた看板が建っていた。

力が抜け、今まで抱え込んでいた不安の一つ一つが嘘のように氷解してゆく。

(……ようやく)

そう。それこそ遠路遙々目指してきた牧場だったのだ。九州から北海道まで……。

わずかな日数にもかかわらず、ずいぶん長い旅をしてきたように感じる。

感慨もひとしおだった。

砂利道の続く場内へと続く道。その先の白い建物にはすでに明かりが灯り、一階の事務所とおぼしき部屋には数人の人影が見え隠れしている。その手前、道の途中には右手に小さなコースがあり、そのコース脇には小さな厩舎が建っていた。

先に牧場の方に見学の許可をもらわなくてはならない。バイクは入り口に置いたまま、その道へと入ってゆく。

バイクの重さから解放された足は不自然に浮ついていた。はやる気持ちとその足を急かして、なんどかつま先を地面に引っ掛けた。

そして楕円形のコース脇に差し掛かったその時だった。

『ブルッ』

馬が鼻を鳴らしている。それは厩舎の方から聞こえてきた。

僕は首を右にひねり、視線を向ける。青紫の景色の中に人影がシルエットになって浮かび上がり、続いて一頭の馬が牽かれてコースに出てきた。

心臓が早鐘を打つ。目はその馬に釘付けになっていた。

わずかに見えるその馬の流星は額の真ん中を綺麗に流れ、鼻上で筆で引いたかのように切れている。そしてはき忘れたソックス。

たえ何万頭という馬がいたとしても、見紛うことはないだろう。

（ティオーだ……）

身じろぎひとつすることなく、ただただ立ち尽くす僕に向かって歩いてくる。

徐々に鮮明になってゆくその肢体。それは近づいてくるにつれ、逆に輪郭をあやふやなものにしていった。

（あ……あれ？）

慌てて目をこすった指の隙間から涙の粒が滑り落ちた。

（何だってんだよ、いったい）

胸を熱くする想いがあふれ出ようとしている。僕はそれを鼻からすすり上げ、つとめて平静を装った。

「あれ、見学かい？」

引き綱を握っていた方が、コース脇の柵を掴んでいた僕に気づいて声を掛けてくれた。

もう一度鼻をすすって一呼吸おいた僕は、ぎこちなく

「はい」

と返事をした。そして続けて話しかけた。

「トウカイテイオーですよ」

その方は薄暗い中に白い歯を浮かび上がらせて笑った。

「そうだよ。よく判るね」

その声に反応するようにテイオーは再び鼻を鳴らし、僕に顔を向けた。

思いのほか長いまつげをしばたせながら、覗き込むように見つめてくるその瞳をとて綺麗だと思った。

「あの、見学してても良いですか？」

『もちろん』と快諾してくれ、しばらく引き運動だから退屈だよ、とも付け加えて言った。

退屈なはずはない。疲れさえも忘れ、穴が空くほど眺めていた。

やがて雲間から朝日が差し込むころ、テイオーは鞍上に人を乗せ、軽やかに走り出した。

（わあ！）

目の前を軽いキャンターで駆け抜けるテイオーは、曙光に照らされて金色に輝いている。

その光景はどこか幻想的で美しかった。

そう、とても美しかったのだ――

夢の続き

僕は疲れていた。夜通しバイクを押していたのだから無理もない。

あの後、乾いたウエスを借りただけであっけないほど簡単にバイクの修理は終わり、今は建物の影に腰掛けてしばしの眠りについていた。

——目の前にティオーがいる。凜々しく、そして優しさを秘めた目で僕をじっと見ていた。

初めて女性の肌に触れた時以来だろう、こんなに戸惑うのは。

僕は恐る恐る震える手を伸ばす。そしてティオーは静かに佇み、近づく手を許した。

（ティオー……）

そしてまさにその触れる瞬間、僕は夢から醒めた。目の前には地面を濡らした洗い場があり、そこにはすでにどの馬の姿も無かった。

見上げた空はどこまでも高く、照りつける太陽はさながら夏を実感させるほど強かった。

「起きた？」

通りかかった従業員の方が声を掛けてきた。この方には昨夜からのいきさつを話していた。それを聞いて同情してくれたのだろう。

その後、何かと優遇してくれていたのだった。

「あ、もう大丈夫です。すいません、邪魔ですか？」

「いや、仕事が一と段落したからね、特別だけど……ティオーのここに行くかい？」

「ええっ、良いんですか！」

「ホントに特別だからね」

まだ呆けていた頭が一気に醒めた。まさかの言葉だ。

「ありがとうございます！」

これは夢の続きなのだろうか？

「あんまり近づかないようにね」

そう言われるまでもなく、人を寄せ付けないような威厳を漂わせてティオーは目の前にいた。

小さく仕切られた馬房の中でも、その存在感は僕を圧倒している。夢の続きは多分に緊張感を伴うものだった。

「大きいですね」

「はは、そうだね。ティオーはちょっと我が強いからね、なかなか人を近付けないんだ」

しばらくそうして二人で眺めていたが、僕に対して警戒心が薄いと見たのか、噛みはしないが気をつけるように、との言葉を残し、従業員の方は僕一人を残して出て行った。

いや、正確にはティオーと二人だ……

（ホントに夢みたいだ）

僕はこれまで感じたことがないほど幸せを感じていた。昨夜の悪夢から一転、こんな幸運が舞い降りようとは文字通り夢にも思わない。

自信を持って言えるが、今このとき、僕は間違いなく日本で一番幸福なティオーファンだろう。

手を伸ばせば触れられる距離にティオーがいる。あのジャパンカップで観客を熱狂させたティオーが、だ。

その二人きりというシチュエーションは特別な想いを募らせた。みんなのティオーから僕だけのティオーになったのだから。

もちろんそんなものは勝手な妄想なのだが、その自己満足は僕を有頂天にさせるに十分すぎるものだった。

静かな時間がとつとつと過ぎてゆく。馬房の奥で素っ気無い素振りを見せるティオーだったが、時折こちらを窺う視線を投げかけてきた。

その回数は徐々に頻繁になり、距離はだんだん縮まってゆく。

じつとそのさまを見守っていた僕の目の前に、突然テイオーの鼻面が現れた。

馬房から突き出された顔は僕を凝視し、その目は夢の中で見たような優しさをたたえていた。

（容れてくれるのか？）

そう感じた僕は恐る恐る手を伸ばした。

もし迂闊にテイオーを驚かして怪我でもさせてしまつてはとんでもない事態になる。なにしろ何億と稼ぐスーパーホースなのだ。

それだけに躊躇し、場内の方にも嚴重に注意されていたのだが、テイオーの仕草はその心配を払拭させるものだった。

上を向けた手のひらにテイオーは口をつけ、唇を軽く動かした。温かい息が吹き付けてくる。遠い存在のスーパーホースが現実に目の前に生きているという事実。あのオレンジの風景にテイオーの血のぬくもりと汗の匂い、荒い息遣いが加わり、それは現実味を帯びた映像となった。

手に顔を押し付けてくる力は思いのほか強い。馬の持つパワーというものはこれほどのものかと関心した。そして僕はさらにテイオーの頬へと手を伸ばすと、その大きな膨らみにそつと触れた。

テイオーに言葉が通じるものならば、僕はありったけの想いのたけと賛辞を君に送るだろう。でもそれは出来ないことだ。だから僕

は掌を通して想いを伝えたい。

短い毛の下に薄い皮膚の感触がある。そしてその中に流れる血液の温度が伝わってくる。

「熱い……」

それはすごく熱かった。体温だけでなく、敗戦により猛りもがくプライドが静かにくすぶっているかのように。

過ぎた時間が長すぎた。僕はもう立ち去らねばならないことに気付いていた。

「これから頑張つてな」

口に出せば軽い言葉だ。でも僕はその言葉に万感の想いを込めたつもりだった。

そしてティオーは『ブルツ！』と鼻を鳴らすと首を大きく縦に振り、僕はそれを見て笑った。

場内の方々に深くお礼を述べた僕は、もう次の瞬間には帰路を急いでいた。

（ホントに頑張れよ）

乾いたエンジン音はこだまする事無く青い空と広大な大地に吸い込まれて消えてゆく。そして僕の頭の中には、ティオーの優しい目

がいつまでも焼き付いて離れないでいた。

僕らが失ったもの

あれから二ヶ月あまりが過ぎた。競馬界と言えばクラシックレースの最後のレース、菊花賞を怪物としての頭角を現してきたビワハヤヒデが圧倒的な力を見せて奪冠。

皐月賞、ダービーでナリタタイシン、ウイニングチケットに後塵を拝した屈辱に熨斗を付けて余りある雪辱。それは現三歳馬のみならず、古馬をも含めた現競走馬の頂点に立ったと思わせるに十分な圧勝劇だった。

かたやトウカイテイオーは当初出走を予定していた天皇賞・秋を回避。万全の体制が未だ整わぬまま虚しく新王者の栄光を眺めていた。

「今日はちよつと遅くなるから」

定年を迎えた両親とともに朝食を取りながら、今日の予定を告げた。

僕は未だ両親とともに暮らしている。父親は定年を迎えたら思う存分魚釣りをするのだと常々話していた。それをようやく実現出来るようになって、今ようやく人生を謳歌していると言った風だ。

それは良いのだが、競馬に行きたい僕を無理やり釣りに誘おうとするのは甚だ迷惑だった。

一方の母親と言えば、苦しい家計を支えるための長年のパートからこちらもようやく開放されて、親しいおばさん連中といそいそと小旅行に行くこと余念がない。

もちろん僕に手配を押し付け、抜かりなく旅行代金を安くあげようとしている。まったくのんきなものだ。

僕は親の小言を聞き流しながらそそくさと家を出た。

その日は多忙を極めた。企画会議が長引いた上に客からのクレームが相次ぎ、その対応は深夜までに及んだ。

これほど働かされても人気業種だけに、給与は他業種に比べればこ
とさら安い。

帰りの終電にも乗り遅れたので、僕は会社の車を借り出して家路に
着いていた。

信号待ちの間にルームライトを点けて買い求めた競馬新聞を速読
する。期待したテイオーの記事は、その日も載っていなかった。

（いつになったら出てくるのか……）

ため息は深く不安しか浮かんでこない。ジャパンカップにも出走
するかどうか？ おそらく回避するだろう。

後ろから響いたクラクションに急かされ、開いた新聞を助手席に

投げ捨てた。

（うるせえなあ）

覗き見たルームミラーに赤い明かりが見える。それは胸騒ぎを伴い点滅しながら近づいてきた。警察か……いや、どうやら消防車のようだ。けたたましくサイレンを鳴らしながら交差点に突入してきた。

（これはまた……）

一台過ぎたすぐ後ろにさらに2台、3台と追い抜いてゆく消防車。どこが火事なのかと興味が湧いた僕は、その後ろについて行く事にした。

差し掛かる交差点で次々と他の消防車が合流してくる。どうやらその方向からすると家の方向らしい。

（結構近いんじゃないか？）

それは更に興味を引いた。少し熱くなった手のひらでハンドルを切りながら消防車が右折した交差点について曲がる。もうそこから夜空を照らす赤い光が見えていた。

（おいおい、こりゃ近いぞ！）

近所で見知った顔が浮かぶ。その中の一人が不幸をこうむる可能性が高くなってきた――が

僕にはそれが自分に降りかかってくるものだとは思っていませんでした。「うそ……だろ……」

その光景に僕は愕然とした。消防車と人だかりに囲まれた炎に包まれた家は、間違いなく僕の住み慣れた家だったのだ。

「親父！ お袋！」

車を飛び出すとその人垣に飛び込む。痛いほど心臓は動悸を激しくしていた。

「どいてくれ！ どけておい！」

そんな馬鹿なことがあるわけない。こんなことがあるわけがない。そう信じたかった。そうあって欲しいと願った。しかし目の前にある現実には僕の逃避を許してはくれない。

（そんな馬鹿な……）

僕はまず両親の安否で頭がいっぱいだった。ようやく野次馬を掻き分けると消火活動をしている消防員にくっついてかかる。

「危ないからさがって！」

「馬鹿野郎、俺ん家なんだよ！ お袋と親父はどうした？」

「家の人？」

横から出てきた責任者らしき消防員が声を掛けてきた。

「ご両親は無事だから。あっちにいる筈だから」

その言葉でどれだけ心が落ち着いたかわからない。その指差す方向に目をやると、パジャマ姿で燃え盛る我が家を見守る両親の姿があった。

「お袋、親父」

僕の声に振り向いた二人。お袋は悲痛な表情をさらに崩して涙を流し、親父は少しうなずいた後、口を真一文字に結んで再び視線を炎に戻した。

僕は泣き崩れるお袋の肩を抱き抱えながら尋ねる。

「何があつたんだ？」

「わからない……気づいたらもう火が……」

（放火か！）

ここ最近、この地区で連続して放火事件が続いていたのだ。しかしそれがまさか自分に降りかかるうとは思っても見なかった。

親父とお袋が長年築いてきた、苦勞してローンを払い続けてきた家が一夜にして灰塵になろうとしている。

親父は涙こそ流していなかった。しかしその無念は僕でさえ計り知れないものだろう。

消防員らの怒号が飛び交う中、いつまでもあると信じて疑わなか

った僕らの幸せはわずかな時間で灰となったのだ。

警察や消防の現場検証が始まった翌朝。僕は自分の部屋があった場所に佇んでいた。

（なんでこんなことに）

先の見えなくなった人生に落胆は大きかった。ふと足元を見るとそこには半分焼け落ちた競馬雑誌がある。拾い上げると焼け残ったティオーの顔が大写しになっていた。

（ティオー……僕はどうすれば……）

そこで初めて悔しさで涙がこぼれた。築いてきた財産も、思い出も、未来さえも僕らは失ってしまったのだ。

火災の原因はほぼ放火だと断定されそうだ。しかし火災保険に入っていないこと、たとえ犯人が見つかったとしても賠償能力などないだろう。

未来は絶望だった。

唯一残ったもの。

それは門の外に出してあった一台のバイクだけだった。

幻の思い出

「こんにちはーっ、さくら急便です！」

オフィスビルの廊下を全力疾走したのち、目的のドアに飛び込む。僕はいま、運送会社に勤めていた。

父親の退職金をつぎ込んで建て直した家が燃えてしまった現在、頼れる収入もない父親はシルバー人材センターへ行き、母親は小さな背中をさらに丸くして再びパートへ出るようになった。

かろうじて残った財産は僕のバイクだけだった。

とにかく金が必要。安月給の旅行会社ではとてもやっていけない訳はない。小さなころから目指していた職業だったが、諦めざるを得なかったのだ。

「あ、さくらさん、ちょっと待ってよ」

何束かの送付袋を受け取って駆け出そうとする僕を呼び止めたその男は、忘れていた配達物を慌てて用意し始める。

次の集荷先の営業時間が終わるまであと五分ほどだ。僕は時計を見ながら、また嫌味を言われそうだと憂鬱になった。

「ごめんな、はい」

「いえいえ、とんでもない」

顔では笑っていても心は焦りに焦っている。伝票に判を素早く捺すと、階下まで再び全力疾走だ。

「遅せえよ、何してんだよ！」

トラックで待っていた正ドライバーは、僕が車内に飛び込むなり怒鳴りつけた。

「すみません、追加の荷物で引き留められちゃって……」

「あのデブおやじだろ、どうせ。もう間に合わねえぞ、言い訳考えとけよ」

正ドライバーは荒々しくトラックを発進させると、渋滞を縫うようにして次のビルへと向かった。

季節はもう十一月が終わろうとしている。一年前、楽しいばかりで東京競馬場へ行ったことが遠い過去の出来事のように。つい三ヶ月前の北海道でさえ、今となっては幻を見ていたのでは？　と思えるほどだった。

「おい、ボケつとすんな。着いただろうが」

「あ、すみません！」

思いを馳せる暇すら見いだせない。歩道に飛び降りた僕は再びオフィスビルに駆け込んで行くのだった。

実家の近くにあるボロアパートの一階、1kの部屋に僕らは仮住まいしている。その夜は珍しく食卓にビールが出ていた。

「あれ、どうしたの？」

極めて苦しい経済状態のはずだから、僕はいぶかしんで聞いた。母親は茹で上がった大根とこんにゃくの煮物を皿によそいながら振り向いて言った。

「今日のはあなたの誕生日でしょ」

「あつ……」

「まあ座れ」

自分も飲みたくてたまらなかったのだろつ。父親は僕を席に促しながら、もうビールをつぎ始めていた。こんな光景もほんの一月前では当たり前だったのに、今ではこんな特別な日にしか見れなくなったのだ。

僕はそれが無性に悲しくて、少しだけ目を伏せた。それを見透かしたように父親がグラスを差し出してきた。

「頑張つてれば何とかなる。頑張れる良い機会と思えば楽しいやないか」

「そんな馬鹿な……」

「幸と不幸は気の持ちようだ」

ずっと工場でうだつが上がらなかった父親をいつも小馬鹿にしていた僕は、そんな人生観を持っていた事に少し驚き、そして少しだけ笑ってグラスを空けた。

翌日も朝早くから荷物が散乱する会社のターミナルを駆けすり回っていた。少しでも歩くと、監視している主任がマイクでかなり立てる。

元々体育会系ではなかった。日が昇ってトラックに乗って配達に出る頃には、いつもすでに疲れ果てた状態だった。

年末が近付くにつれて荷物の量は激増する。

（今日も遅くなりそうだな……）

ビル街の暮れゆく景色を眺めながら、疲れた体を意識した。いや、体だけではない。心も疲れ果てていた。

「ほい、ヨロシクー」

「はい、行ってきますー！」

勢いよく飛び出した僕は、その時誰かに呼び止められた。振り向くとかつての同僚がそこにいた。

「おう……」

同期の男だ。とは言ってもいけ好かない奴だった。

「お前そんなコトしてんのか？」

（そんなコト……だと）

「寒くない？」

そう言うのと半笑いの顔で会社のロゴ入りTシャツを一瞥した。かたや奴は小洒落た三つボタンのシックなスーツに身を包み、磨かれた靴に薄い革張りのアタッシューケースを提げている。それは紛れもなく、つい最近まで僕も装っていたスタイルだった。

悔しいとかそう言うんじゃない、僕は急に恥ずかしさがこみ上げてきた。そして

「じゃあな」

と告げると、逃げるようにしてその場を去った。

なぜそんな風に思えてしまう自分が情けないが、確かに僕はこの時恥ずかしかったのだ。

冬はさらに深まり、もうクリスマスが間近に迫っていた。年末のお歳暮の季節、忙しさはピークに達していた。

足腰は酷使され、息つく暇もない状況では自然考えることも忘れてしまう。今の僕には、一日のうちにトウカイテイオーの名前すら思い出すこともなくなっている。

（あれ？）

早朝の荷分け作業の最中、目の前のコンベアが突然ぐにやりと曲

がった。

いや、正確には視界が歪んだのだ。

危機感が頭をよぎったのはほんの一瞬でしかない。その後、僕は真っ暗な深淵に墜ちていった――

心の闇

目が覚めるとそこは白い世界だった。かすかにリノリウムの床にゴム底靴のこすれる音が響いている。そして首を横に向けるとそこには父親が椅子に腰掛けていた。

（ここは……）

腕にかすかな違和感を覚え、首を反対に向けて確認すると、そこにはシーツの脇からはみ出た腕と、そのひじに繋がる細いチューブが見えた。

（病院？）

とっさに今の状況が飲み込めない。突然途絶えた記憶にこれまでの過程がすぐさま掴めないのだ。しかし朝の作業をしている場面思い至ると、ああ……そうか、と納得できた。

父親がシーツの擦れる音に気づいたのだろう、冬の空に似つかわしくない眩しい窓の外の景色から目を離し、こちらに顔を向けた。

「おお、目が覚めたか」

「……」

「心配するな、単なる過労みただ」

「ごめん……心配かけた？」

「なに、心配は今に始まったことじゃない。お前は昔から心配ばかりかけてきたからな」

「ごめん」

「いや、俺こそお前の将来を潰してしまったようなもんだからな、本当に悪いと思ってる」

父親のせいではない。無作為な悪意が僕らを襲っただけのことだ。でもそれを思うと僕はいつもやり場のない怒りで我を失いそうになる。

「親父のせいじゃないだろ」

僕はぶっきらぼうにそう言うと、顔をそむけて流れ込む点滴のしずくを眺めていた。

（なんで俺たちがこんな目に……）

握り締めたこぶしが微かに震える。もうあの生活には戻れないのだろうか？ 決して裕福ではなかった。それでも小さな幸福を皆で喜びあいながら生活できた、あの近くて遠い過去。

「もうすぐ母さんが来る。俺はもう仕事だから行くぞ」

父親は道路工事の誘導員をやっている。割の良い夜の仕事をわざわざ選んでいた。

（親父だってこれから楽しみにしていた将来があったのにな）

本当なら今頃旬のブリなどを狙って嬉々として竿を振っていることだろう。それがいまや振り回しているのは赤い誘導灯だった。それを思うとやるせなさが胸に渦巻く。でもそれは家族全員がそれぞれに対して思っていたことだ。

その日、夕方になって迎えに来た母に連れられて病院をあとにした。会社からは年明けまで休養するようにとの通達があり、僕は一週間ほどの暇を持て余すこととなった。

その夜、僕は何気なく散歩をしていた。明かりを煌々と点けた家々を見ながら、かつては自分もその中にいたのだと悲しい郷愁に襲われる。その先の角を曲がると焼け落ちてシートが被せられた無残な家の跡があった。

そこに僕はしばし立ちすくんでいた。

（なんでこんな目に）

近所の噂では受験ノイローゼのようになって奇行が目立つ、とある家の息子の仕業ではないかと言われていた。もちろん証拠を掴めていないからだろう、警察も手をこまねいていた。

やり場のない怒りは道々灯る家々の明かりさえ憎憎しげに思えてくる。僕はその場を立ち去り、ある家へとその足を向けていた。

表札に掲げられた目的の名字を見つけると足を止める。乾いた風

が強く吹き付ける夜だった。朝夕には児童で賑わう通学路に乾いた音を立てて一部の新聞がアスファルトを滑ってゆく。僕はそれをひたくり目の前の家を見上げた。放火したのではと噂される受験生が住んでいる家だ。

（こいつらも同じ目にあわせてやる！）

乾いた紙くずを握り締めると静かに門扉を開く。僕の心は悪意に満ちていた。

（ふざけんな、ぬくぬくと生活してんじゃねえよ）

猛る心とは裏腹に静かに歩を進め、裏庭へと入って行く。そこには物置があり、その周りには入りきらない雑多な家具や生活用具、廃品回収に出すつもりだろうか、新聞雑誌などが積み上げられていた。

家族の団欒の声が聞き漏れてくる。しかしそれは今の僕にとっては苦痛でしかないのだ。震える手でライターを取り出し親指を引きおろした。

暗闇が赤く照らし出され、それはあの日の地獄の光景を思い出させる。

揺らぐ炎、しかしそれを新聞に近づけると、とある文字が浮かび上がった。

『トウカイテイオー一年ぶりの出走！奇跡は起きるか？』

僕の目はその記事に釘付けになった。あの日のテイオーがカラー

紙面に堂々と掲載されていたのだ。

—— 昨年の悪夢から一年。三度目の骨折を乗り越えここまで懸命の調整が行われてきた。秋の天皇賞、ジャパンカップを回避してまでここ一本に狙いを定めてきた陣営の雪辱に対する意欲は並々ならぬものを感じる。しかし現実的に考えるとここは奇跡でも起きない限り勝負にはならないだろう。なにしろ相手が悪い。菊花賞で見せたビワハヤヒデの強さは圧倒的でもはや国内に敵はいないと断言できる。さらにジャパンカップを制したレガシーワールドも順調な仕上がりを見せ、最強世代と謳われるウイニングチケット、ナリタタイシン。また近年の牝馬にしては突出した強さを見せたベガ、昨年の有馬記念覇者メジロパーマーも虎視眈々だ。これらの勢力を覆すだけでも相当な能力を要求されるうえにましてや一年の休養、ぶっつけ本番。状況は困難を通り越して絶望といわざるを得ない。

かなり辛らつな記事ではあった。しかし僕はその事実感動していた。

（テイオー…… お前はまだ諦めてなかったのか？）

ライターの火が消え、またもとの暗闇が辺りを支配する。

（僕は……）

僕はその新聞を四つ折りにして後ろポケットにしまいこんだ。

（情けない！ 情けない！ 情けないよ）

ふと我に返った僕は、自分の起こそうとしていた愚行をひどく恥

じた。

（僕は情けない！）

静かにその場から足を遠のかせて家路につく。そしてその足は心なしかせわしげだった。今日は金曜日、このテイオーが出走する有馬記念は明後日に迫っている。僕はある決心を三度胸に湧き起こるのを抑えきれないでいた。

「あんた、どっか行くの？」

家に戻って簡単な身支度をする僕を母親が不審げに尋ねた。

「うん、ちょっと出かけてくる。月曜の朝には帰ってくるから」

「月曜って……あんた体は大丈夫なの？」

「うん、もう平気だから。心配しないで」

母親にしてみれば学生の頃から放浪癖がある僕に対してその行動に驚きはしなかっただろう。しかしこの時は少し事情が違った。体調ももちろん、無駄な金銭の浪費を嫌ったところもあると思う。

しかしその心配をよそに僕はその三十分後にはバイクのキーをひねってエンジンを掛けていた。

「大丈夫、心配しないで」

「気をつけなさいよ」

「うん」

母親にはもちろん今から有馬記念の行われる千葉県の中山競馬場に行くなどということは告げていない。もし告げたならば心底あきれるか眉根をしかめて激怒していただろう。

でも僕はいま光を求めていた。それはもしかしたらトウカイテイオーがもたらしてくれるのではないかと、淡い期待を抱いていたのだ。いや、もつと単純なこともかもしれない。しかし、いずれにしても僕は今の衝動を抑えることが出来ないでいた。

お金もないから高速道路を使えるはずもない。ひたすた国道を走りぬかねばならない。

そして市内を抜けようとする頃、信号待ちをする交差点の左手に道路工事をしている現場があった。そこにはヘルメットを被り、誘導灯を振ってドライバーに頭を下げる初老の男の姿が見える。

僕にはその人物がひと目で自分の父親だと分かった。

白い息を吐きながら一心に車の動きを注視している父親。その姿はあまりにも哀れで、そして自分と重なった。

（頑張れよ）

口には出さなかったが、青になった信号に促されて僕はアクセルを開け、そしてひたすら東の空を目指した。

願

師走も深まった夜の街道はことさら寒かった。僕は何度もコンビに寄り温かい飲み物で暖をとったが、再び走り出すと瞬く間にもよおし、それは体外に排出された。それでも数え切れないほどのトラックを追い抜き、日が昇るころには土曜競馬で盛り上がる中山競馬場に到着していた。

これだけ早く家を出たのは当日パドックで最前列を確保したかったからだ。僕はどうしても手が届くほどの位置からテイオーを見たかった。それでなければ僕とテイオーの思い出が幻ではなかったと確信できないような気がしたのだ。

しかしそこにはすでにかなりの人数が列をなしていた。列の最後尾を探して歩を進めてゆくうちに不安がだんだん募ってくる。この人数がすべてパドックへ向かえばとても最前列など確保できるものではない。

実はかなりの割合がトラック狙いのアマチュアカメラマンなのである。ゲートが開けばパドック派よりも圧倒的にコースへと足を向ける人数のほうが多い。しかし、それも実際はゲートが開くまではわからないのである。

ダンボールや毛布、寝袋を準備してきている人々の中に混じり、厚手のジャンパーだけを頼りに僕は列の最後尾に腰を下ろした。

周りからは楽しげな声ばかりが聞こえてくる。ここ最近のレースを見てなかった僕は、その声の情報を頼りに出走馬の力関係を思い浮かべていた。

それにしても底冷えする夜だ。人は周りにたくさんいるのに僕だけは孤独だった。冷たいコンクリートに下ろした腰から冷気が這い上がってくる。その寒さに身を縮こませながら僕はじっと夜が明けるのを待っていた。

「これより入場制限を行います！ 列を離れるともう戻れません」

係員が間もなくゲートが開くことを告げると、徹夜組は殺気を漲らせて腰をあげた。『開門ダッシュ』と呼ばれるG1レースではよく見られる光景だが、今日に限ってはいつもよりかなり数が多いのだそうだ。

三歳馬の頂点に立った新たな白い王者ビワハヤヒデが、歴戦の古馬たちをどのように撃破するのか？ また出走場のなかで八頭ものG1馬が顔を揃えるというかつてない豪華メンバーにこの日は朝からかなりのヒートアップを見せていたのだ。

もちろんゲートが開くとその状況はさらに加熱した。僕は脇目もふらずパドックへと続く通路を駆ける。このときばかりは普段から走り回っていることに感謝した。かなりの人数を追い抜いて、パドック脇にもはやわずかしが残っていない空きスペースに滑り込むようにして飛び込んだ。

息を切らして半目を開く僕の目の前に次々と人がなだれ込んでくる。間一髪間に合わなかった人々は歯噛みして悔しさを見せた。それを見て僕も気の毒だとは思ったのだが、こちらも徹夜を二日続けて確保したのだ。残念だが諦めてもらうより他ないだろう。

とにかく、僕はもっとも近い距離で再びテイオーに相まみえるところまでたどり着くことができたのだ。

空は鉛色で重苦しかったが、それに反して場内の盛り上がりは尋常ではなかった。物凄い人の多さだ、去年のジャパンカップどころではない。

それは競馬場の広さ自体、東京競馬場に比べて小さな中山競馬場であるからとも言えるが、それを差し引いても僕にとっては空前の混雑だった。もちろんパドックに一度張り付いたときから一步も外に出ることは出来ない。自分のスペースを主張していてもぐいぐいとその領域を侵そうと身を割り込ませてくる輩があとを絶たなかった。

だからこの日は朝からずっとレースを見ていない。しかし見たからといって賭ける金があるわけでもない。僕は軽い財布をジャンパールのポケットの中で遊びながらそのときを待っていた。

後ろから容赦なく圧力がかかってくる。8レースが終わった直後だというのに、その圧力は尋常なものではなかった。柵に押し付けられるようにしてこのときをずっと待っていた。次の9レースがいよいよ日本中が注目する有馬記念だ。僕は久しぶりにテイオーに会えることになったか感慨深いものを感じていた。

もっと嬉しくてはしゃいでしまう僕の姿を予想していたのだが、実際はもっと落ち着いていて、そして感動は深かった。

いよいよパドックに姿を現した精鋭十四騎のサラブレッド。それぞれが勲章を誇り、己の尊厳をかけてぶつかる特別なレース、それが有馬記念だ。そしてその大舞台に僕のテイオーは静かに、しかし内に秘めた闘志を端ばしに見せながら入場してきた。

その姿はかつて僕と触れ合ったテイオーとは全く違っていた。まさに戦士としてのオーラを身に纏っている。後ろ足をゆっくりと、しかし力強く踏み込みながら僕の眼前へと迫ってくる。

もちろん僕のほうを向いて意思表示してくれるだろう、などという浅はかな期待は見事に裏切られた。一点をじっと見つめ、脇目も振ることなく悠然とパドックを周回してゆく。その姿は初めてテイオーを見た時に感じた圧倒的なオーラと人を寄せ付けない威風を思い出させた。

（もどってきた……テイオーが）

あの時感じた期待感、それはこのときにも確かに胸に感じられていた。

『テイオーなら……』

『テイオーだから』

（……やってくれる）

そう競馬ファンが口を揃えていた去年だったが、この一年でその言葉を口にするものはほとんどいない。しかしこの悠然と周回する威容を目の当たりにしてはそんな想いが再び甦ってくるのだ。事実、このパドック周回が始まってからテイオーのオッズが

下がっていた。

芦毛（白い毛）の新王者ビワハヤヒデも堂々たる周回を重ねていたが、僕の目にはテイオーの雄姿がはるかに眩しく目に映っている。

「テイオーが勝ったら凄いことだね」

隣に陣取るカップルの女性がそんなことを彼氏に訊ねた。それを聞いた彼氏はこう言った。

「あり得ないでしょ、勝ったら奇跡だね」

そう言われた彼女は少し口を尖らせて目をパドックに戻した。その台詞を聞いてひとこと言いたくなっただろう、後ろにいる長いこと競馬をやったような初老の男性は声高に言った。

「奇跡ってのは起こらないから奇跡って言うんだよ。色んな有馬見てきたが、テイオーが勝つことだけはないな」

僕は気分が悪かった。高揚してきた心に水を掛けられたような格好だ。でもその言葉に間違いがないことも分かっていた。競走馬にとってブランクとは人間が考えるより遥かに大きな壁となっていた。

これまでもどれほどの名馬であってもこのブランクの壁にぶつかり、あえなく惨敗を喫している。それがましてやG1であれば、長い競馬の歴史の中では一頭の例外すら見つけることができないほどだ。

（そんなこと分かってるんだ。でも、だから『テイオーなら……』なんだよ）

馬場への入場が迫る。厳しい顔をしたジョッキーたちが次々を騎乗を始めた。その中でテイオーの手綱を取るのは去年に引き続き、乗り替わりで失態を犯した田原騎手だった。口を真一文字にむすび、去年の悪夢を払拭しようとしているように見える。

あのレースの直後、テイオーの敗因はこの田原騎手に集中した。

『スタートのミス』

『岡部なら楽勝だった』

『騎手をやめろ』

スタートのミスは騎手だけが負うものではない。しかしテイオー信者はそれをすべてこの騎手のせいにして溜飲を下げていた。

『負けたのはテイオーではなく騎手のせい』

そうすることで夢を繋ごうとしたファン、そしてそれを敢えて受け止めてあくまでテイオーを庇い、ファンの夢を守ろうと一年間、耐えに耐えた騎手の厳しい表情がそこにはあった。

このとき田原騎手の胸にはどんな想いが去来していたのだろうか？ 一緒になつて彼を罵っていた僕には、それを窺い知ることなどできない。

その姿を見送った僕は、いや周りにいた人間全員はすべてコース側に殺到する。その足で馬券売り場へ寄り、買えるだけの金額でトウカイテイオーの単勝馬券を購入した。たかだか千円の馬券、でも今の自分にはこれが精一杯の金額だ。

比較的ゴールに近い場所まで移動し、人ごみの中でスタートを待つ。次々と馬場に入場してくる各馬が紹介されるたびに場内はどよめき、歓声を上げた。

ふと自分が随分場違いな所にいるような気がする。浮き足立った観客たちの中になぜ自分がいま居るのだろうか？ 改めて周りを見渡すと誰もが熱気を帯びて自分とあまりにもかけ離れているような気がしたのだ。

そしてスタートが近づいてきた。

僕は息を呑みこんでターフビジョンに映し出されたゲートを眺めていた。いつの間にか両手を胸の前に組みさながらクリスチャンのようだったが、それはさほど間違った表現ではないだろう。僕は祈っていたのだから。

ただしそれはイエスキリストでも仏陀にでもない、僕はテイオーに祈っていた。

スターターが台上に上り旗を振る。それを合図にファンファーレが始まると怒涛の歓声がスタンドを揺るがせた。ビリビリと空気が震えるほどの歓声の渦中にあっても僕はそれに感化されることもない。ただじっとテイオーを見つめていただけだった。

次々とゲートに収まってゆく各馬。ビワハヤヒデ、レガシーワールド、ウイニングチケット、ナリタイシン、メジロパーマー、ベガ……そしてトウカイテイオーと、まさに豪華絢爛なメンバーだ。

緊張が走る瞬間がやがて訪れ、一瞬息を呑んだあと――

『スタートしましたっ！』

ついにゲートが切られた。注視していたターフビジョンに真っ先に映ったのはトウカイテイオーだ。去年とはうって変わり抜群のスタートを決めて飛び出した。

僕はそれだけでも嬉しくて、組んだ手を更に力強く握り締めた。

『トウカイテイオー好スタート、しかし外からメジロパーマー。メジロパーマーがやはり行った行った！』

昨年の覇者、メジロパーマーが予想通りレースを引っ張る形で幕は開かれた。続いてビワハヤヒデ、ウイニングチケットらが続ぎ、テイオーは中団にまで下がっている。向こう正面からスタートをした各馬は一度スタンド前を通過したのち、もう一周してゴールを目指す。

その一周目のスタンド前の声援はまさに割れんばかりのものだった。テイオーは内々に控え、じっと力をためているようだ。一団の馬群は文字通りの地響きを起こしながらあつという間に目の前を走り去っていった。

一瞬見えたテイオーの目はとても美しく、そして厳しかった。

『先頭はメジロパーマー。ウイニングチケットはややかかり気味か？ ビワハヤヒデに続いてレガシーワールド虎視眈々……』

向こう正面に走り去った馬群から再びターフビジョンに目を移す。それはいま目の前にあった映像にもかかわらず、どこか現実離れしたような印象をつけた。

ふと我に返ったように自分を省みる。僕は何を求めてここにいるのだろうか？ 何を期待しているのだろうか？

きっとその答えはテイオーが出してくれるのだろうか……

レースが動き出す3コーナーに差し掛かると各馬は一斉に動き出した。トウカイテイオーは内から外へ、綺麗に抜け出してやはり追撃体制に入る。去年のような手応えとは全く違っていた。その姿に期待が膨らみ、胸がぐつと熱くなる。

『さあ、ビワハヤヒデ動いた、早くも先頭メジロパーマーを捉えにかかる！ 続いてレガシーワールドもやってきた。ウイニングチケットは少し遅れたか！』

トウカイテイオーの動きだけを見ていた。中団から外に持ち出して豪快に外をマクって上がってくる。その姿に、その雄姿に期待が現実になるのではないかと、僕はずっと閉じていた口を思わず開いた。

「テイオー！」

最終の4コーナー。真っ先に飛び出してきたのはやはり白い馬体、新たな怪物ビワハヤヒデだ。

『さあ、ビワハヤヒデ先頭だ、後続との差を広げていく！』

さすがに断然一番人気を誇るだけはある。その光景に観客は狂喜して歓声のトーンをさらに上げた。さながらスタンドが爆発したかのようだ。

「テイオー——っ！」

その歓声にあらがうように僕は叫ぶ。そしてそれに応えるかのよう——

『トウカイテイオーやってきた！　なんとトウカイテイオーだっ！』

白と青とピンクの勝負服、そして額に流星をあしらった不屈の馬が豪快に脚を伸ばしてきたのだ。そして新たに誕生した白い王者に敢然と襲い掛かった。

『先頭はビワハヤヒデ、しかしトウカイテイオーやってきた！　他はちよつと置かれている、完全に一騎打ちになりそうだ』

歓声の色が一気に変わった。しかしそれは絶望とかそういうものではなく、テイオーの走りに驚愕と喜びを交えたものだ。皆が本当は期待していたのかもしれない。絶望と思うことでショックを和らげようとしていたのかもしれない。

ただ一頭、テイオー自身を除いては——

直線、坂の下からビワハヤヒデと共にテイオーが駆け上がってくる。両者の火花が見えるような激しい叩き合いだ。

「頑張れ！　頑張れっ！」

全身全霊をかけたその疾駆する姿に僕は『頑張れ』という言葉しか出てこなかった。そしてその姿が父親や、母親や、そして僕の姿とオーバーラップして見えたのだ。

「頑張れ、頑張れ！　がんば……」

そこから先はもう言葉が出なかった。苦しかった北海道の夜、そして触れ合ったあの日、この手のひらが覚えているティオーの熱、焼けてしまった写真、そして救ってくれたティオーの記事……。

様々な想いが胸を衝き、その想いはあの日オレンジの風景の中で勝利の雄叫びを上げた歓喜の情景にたどり着いた。そしてそれらが涙となって溢れ、僕には止められなくなったのだ。

『ビワハヤヒデ、トウカイテイオー。ビワハヤヒデ、トウカイテイオー！　トウカイテイオーだ、トウカイテイオーだ！』

一気にライバルを抜き去ったティオーはさらに差を広げ、涙でぼやけた視界の中でゴールに飛び込んだ。十数万の観衆は熱狂の極みに達し、この時たしかに奇跡を目撃した。そしてこの瞬間このレースは伝説となる。

『トウカイテイオー、奇跡の復活！　勝ったのはトウカイテイオーだ！』

場内の興奮はすさまじいものだった。誰しもが驚き、そして喜びを露わに手を打っていた。僕はと言えば抑えても抑えきれない感情

が溢れてきて、顔を覆って号泣していた。

嬉しかった。本当に嬉しかった。そして僕は教えられたのだ、トウカイテイオーに『あきらめない』という言葉の意味を。

いつまでも鳴り止まない歓声の中、いつもは派手にガッツポーズを決める田原騎手がうつむきながらウイニングランへと向かう。スタンド前に戻ってきた田原騎手はゴーグルを外すと真っ先に涙を拭いた。そして人目もはばからずに男泣きに泣いていた。

みんな辛かったのだ。一年間、辛かったのだ。

拝啓、テイオー様

季節はめぐり平成18年12月24日中山競馬場。僕はまた怒涛の歓声の渦の中にいた。今まさに有馬記念の行われている真つ最中だ。

一団となってスタンド前を駆けてゆく馬群に一頭ぼつんと取り残されたように、断然の人氣を背負ったディープリンパクトがなんの気負いもなく走っている。

―― 拝啓テイオー様

今年は北海道も暖かいとのこと、いかがお過ごしでしょうか？

あれから十四年という歳月が流れました。いまはもう種牡馬として悠々自適の生活を送られていることですね。僕はと言えば、質素ながらも不足のない幸せな生活を送っています。

この流れた歳月のなかで色々なことがありました。競馬界では物凄い種牡馬が出てきて日本の競走馬の血を一新し、二頭の三冠馬が誕生しました。僕にもそれは色々なことが起き、そしていずれも今では思い出となりました。

あなたの子供たちは残念ながらまだ恵まれていませんが、そのうち良い子供が出てくることを切に願ってやみません。でも血は残せなくてもあなたの記憶と記録は長く語り継がれることですね。本当に伝説と言われるまでになりましたよ、あのレースは。

そうそう、今日走っているあの馬も伝説になるような馬です。ちよつとした社会現象にまでなるほどですから、その人気は物凄いですよ。今日で引退しちゃうんですけどね、最後のレースを勝てばやつぱり長く語り継がれることでしょう。

あなたは本当に眩しいほどの栄光と絶望の暗闇を走ってきましたね。その光と影につづられた生き様を僕は生涯忘れることはないです。

あのジャンパカップを覚えていますか？ 有馬記念を覚えていますか？

僕はあなたにたくさんの事を教わりました。本当に感謝しています。

感動をありがとう。そして幸せな後世を送ってください――

向こう正面から3コーナーに差し掛かるあたりで各馬がペースを上げるなか、まるで止まっている馬を相手にしているかのように後方を走っていたディープリンパクトが外から追い抜いてゆく。それに呼応して歓声がさらに上がった。

『さあ来たぞ、ディープリンパクト。あつという間に先団に取り付いた！』

まったくもって強い。あきれるほどの強さをこの馬は持っている。

外を回るロスなど微塵も感じさせずに易々と後ろからごぼう抜きを見せてやってきた。

あの日もこんな風にテイオーに対して声援が送られていたのだ。それを思うと僕は少しセンチメンタルになり、そして圧倒的な力を最後まで見せ付けて勝利を収めた馬に――

少し力のない拍手を送った。

— F I N —

拝啓、テイオー様（後書き）

競馬はロマンとよく言われます。ギャンブルとしての一面も魅力ですが、こういったスタンスで競馬を楽しめるのも魅力のひとつですよね。もし、少しでも興味を持たれたら、一度芝生を疾走するサラブレッド達を見に行かれてはどうでしょうか？

思わぬこんな馬との出会いが待っているかも知れませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2053b/>

ヒーローは流星をオレンジに染めて

2010年10月9日18時20分発行